

あのときの常呂・写真館

VOL 52

(1976年)

昭和51年3月22日 登小学卒業式・閉校式



▶「あのときの常呂・写真館 VOL 12」で、昭和27年8月に登小学校の校舎建設、昭和36年11月に体育館建設、昭和40年4月のブランコ、回旋塔整備、昭和42年7月の学校プール整備、同年9月の全道単級複式教育研究大会を写真と文で紹介しました。

▶その後、昭和47年に開校20周年を迎えますが、児童数は6人、2学級から1学級減、49年には9人で再び2学級になりますが、翌50年には5人、1学級となり、昭和51年3月22日に最後の卒業式と閉校式を行っています。

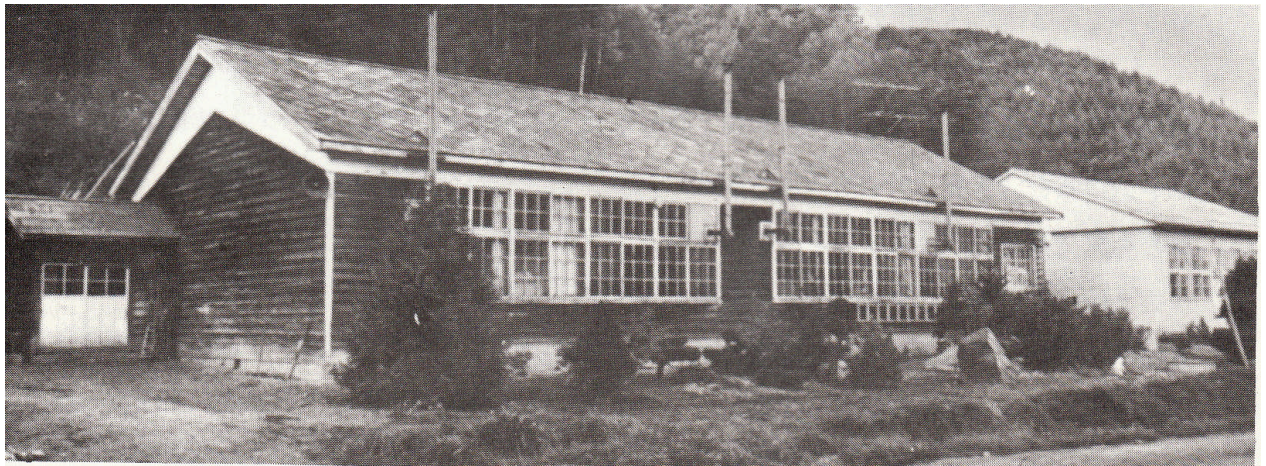


＊登小学校・吉野小学校の閉校記念誌「思いで」には、閉校までの24年間で134人の卒業生を送り出したことが記されています。最後の卒業式は、卒業生1人、在校生4人でした。

＊記念誌には、開校の日のことを田中昭次郎さんが、「昭和27年11月11日、初雪が大地を白一色に包んで長い冬の生活が始まる。登小学校開校式当日の情景である。この新しい小学校で学ぶ生徒たち、部落の父兄、関係機関の方々、先生とみんながこの新雪のように清々しく見える。登部落にも小学校ができた。〈よかったなあ、おめでとう〉と参列者が交わす単純なあいさつにも真実の心があった…」と綴っています。



＊卒業式と閉校式



上：閉校時の登小学校校舎



左：現在、校舎はなく、昭和58年10月建立の登小学校跡の木柱があるのみです。場所は、旧登神社から少し行った道路の右側にあります。

（注：閉校記念誌「思いで」から）

登小学校を回顧して VOL 12 も一緒にご覧ください

小清水町立止別小学校長 小田島 達 夫

「いい湯だなハハハ」といともどかな唄声の水呑場を改造した風呂場から聞こえてくる。一人が唄うとまた負けじと唄い出す。「早く出てよ」と女子の声が聞こえる。風呂場の中では校長先生と一、二年の男子が御気嫌でうたっている。

古い住宅から風呂釜を見つけ、利用方法を考えていたのだが、これで風呂をつくり、入浴させて帰したらということになり、PTAに相談したところ、早速昔のハッカ釜のロストルを見つけたら、コンクリート枠を役場交渉して見付けてくれたりして、立派な風呂をつくり上げてくれた。洗い場は水呑場を利用して私達がつくった。（註：昭和44年7月設置）

四時間目の終り五、六年生が火をたきつける。給食を終わって一、二年生はプールに急ぐ。たて十八米、横八米の簡易プールだ。これも私達が考案したものだ。グラウンド横の草地をショベルで掘って、肥料袋を千五百袋ほど砂をつめ、それを掘った縁に千鳥に積み上げ、それにビニールを回すというものだった。肥料袋を使うということはなかなかユニークだと評判をとったものだ。底には何を使ったらいいかということで試みとして肥料袋を切りひらいて一枚のシートを作り上げてそれを底に敷くということにした。運動場一杯にひろげて電気ごてで貼り合わせ、その出来上ったものをおそろおそろプールに運んで底に敷いてみた。敷いてみると底がやわらかい泥のためにズルズルとぬかり、貼り目から泥が入りこんで底の役目を果たさなかった。

早速教育委員会に走り、バラスを買ってもらい、ダンプ十台ほど運びこんだ。それで泥をおさえることに成功した。グラウンドの横を流れる小川をせきとめて流れ路をつくり、土管を通してプールに流し込むという方法をとった。砂利、木炭などを入れて一応の浄化装置も作り上げた。冷たい水が流れこんで満水になったところでプール開きだ。子供、部落の方々の見守る中でおはらいがすみ、プール開きが行なわれた。丁度NHKの取材があり、「私達の小さなプール」と題して子供の時間に全国放送されたものだ。

出来上ったプールで子供達は泳いだ。一つも泳げなかった子供達が今日は一米、明日は二米というように上達していった。どの学校の子供達よりも泳ぐことが出来るようになり子供達に誇りと自信がついていった。その後砂利敷のプールは底だけモルタル塗りになったが、もぐるとザリガニやどんこがおおいでいるほほえましいプールであった。（註：昭和42年7月完成）

丁度裏山の木を切ったので枝木がたくさんあったので、それをひろって来て火をつけ、その火にあたりながらプールに飛びこむというようなものだった。こんなプールが常呂町に三つもできるようになって僻地の子供たちも泳ぐことが出来るようになった。

泳いだけでそのまま帰してよいのだろうかと思案した結果生れたのが前述の風呂だ。なかなか子供達の評判がよい。教師と子供の裸のふれ合い、そこにはなんの虚色もない裸の人間と人間のつき合いがあり、それがどんなに明日の指導に大きく役立ったことであろう。（早く出てよ）（まだだよネ先生）と一年生の声、裸と裸のふれ合い。小さい学校だったからこそ出来たと思うのである。

しかし、その学校もこの三月でなくなる。校長としての一年生を育ててくれた登校。それがなくなる。ほんとうに淋しいことだ。

昔を回顧しながら、私を育ててくれた登校の最后を静かに送ってあげたいと思うのである。さようなら登よ、さようなら登校。